

## ■いわて文化ノート

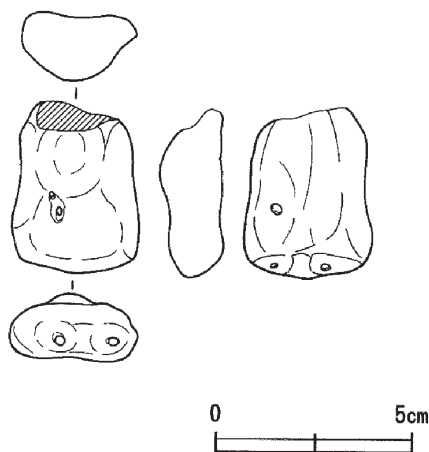
# 縄文時代の土偶

専門学芸員 八木勝枝 (考古部門)

約12,000年前から約2,100年前までの約1万年間に及ぶ縄文時代。人々は粘土を用いて、素焼きの人形を数多く作り出しました。土偶の多くは、乳房や下腹部、腰周りがふくよかに表現されていることから、女性を表していると考えられています。時期別にどのように土偶は発展を遂げたのか、見ていきましょう。

### 縄文時代早期 (約8,000～6,000年前)

岩手県内で最も古い土偶と考えられているのは、奥州市胆沢区休場遺跡出土の土偶です(下図)。



土偶 奥州市胆沢区休場遺跡出土  
縄文時代早期 岩手県蔵

休場遺跡出土の土偶は、縄文時代早期後半の竪穴住居跡から見つかりました。胴の上半分が欠けているため、乳房があつたのか分かりませんが、下腹部に膨らみがあることから、妊娠像と考えられます。早期の土偶はとても小さく、縦の長さ4.3cm、横幅3.3cmです。下の面にはごく緩やかな膨らみが二カ所あり、中央には凹みがあります。これらは脚を表現したものかもしれません。

また、早期の土偶は岩手県内では休場遺跡の1点のみで、東北地方を広く探しても、ごくわずかしが見つかっていません。

### 縄文時代前期 (約6,000～5,000年前)

人形に近い形に作られるようになります。下写真は、一関市花泉町寺場遺跡出土の土偶です。



土偶 一関市寺場遺跡出土  
縄文時代前期 当館蔵

顔は凹み、肩が張り出しています。早期にはわずかだった脚は、寺場遺跡土偶では、下に2本伸びた脚に発達していませんが、左側の乳房は剥がれていて残っていませんが、左側の乳房はとても豊満です。寺場遺跡をはじめ、前期の土偶は下腹部のふくらみはあまり目立ちません。しかし、腰まわりが横に張り出しており、柔らかな女性像であることが分かります。

前期の土偶は板状であることが基本形です。そのため、乳房以外では腰を横に張り出すことで女性を表現しています。

岩手県内では縄文時代前期末の土偶がとても多く出土しています。雫石町塩ヶ森I遺跡からは53点程の土偶が出土・確認されています。一つの集落で複数の土偶が作られ、用いられるようになったのでしょうか。また大きさは20cm位のものが作られるようになります。

### 縄文時代中期 (約5,000～4,000年前)

青森県三内丸山遺跡などのように、集落が大規模になった時期です。発掘して

見つかる家の数が増えることなどから、人口の増加が想定されています。前期から中期の始めにかけては、暖かい気候で、食糧をたくさん得ることができ、人口増加に繋がったと考えられています。食生活が豊かだった岩手の中期集落の中には、あまり土偶を用いていない集落もあったようです。大形環状集落を営んだ紫波町西田遺跡では、わずか5点しか見つかりません。

縄文時代中期の終わり頃から後期の初め頃は、寒冷化が進み、降雨量も多く、集落周辺の植生に変化が生じました。それまで大勢で集住する大形環状集落は解体し、小規模集落に別れて生活するようになります。一か所に多くの人々が暮らすと、生活物資が枯渇してしまうのです。

中期末から後期初頭は、全国的に土偶の数が激減する時期です。関東地方では、土偶は全く作られなくなります。しかし、北東北などは比較的まとまった数の土偶が見つかります。

### 縄文時代後期 (約4,000～3,200年前)

後期の土偶の特徴として、膝を抱えたり、手を合わせるなど、様々なポーズの土偶が出現します。下写真は腕先と膝下を欠きますが、膝を抱え、腕か手を合わせたポーズを想像できます。



座る土偶 盛岡市玉山区日戸遺跡出土  
縄文時代後期 当館蔵

また、土偶をよく観察してみると、様々なことが分かります。下写真の土偶は、耳たぶに円形の粘土が貼り付けられています。これは、耳飾りを装着した様子を表現したものです。



土偶 一関市花泉町貝鳥貝塚出土  
縄文時代後期 当館蔵

縄文時代の前期あたりから、石製・土製の耳飾りが多く見つかるようになりますが、土偶に耳飾りの装着した様子が示されていることから、実際に耳飾りとして用いられていたものだと判断できるのです。

右上写真の土偶は、雫石川のほとりでの縄文時代後期から晩期にかけて営まれた盛岡市萩内遺跡から出土しました。この土偶は国の重要文化財に指定されていますが、指定された理由は主に2つ挙げられます。一つは、大きさです。この土偶は頭部しか見つかっていませんが、首の付け根が欠けていることから、もともとは全身像だったと考えられています。頭部残存長22.6cmですので、全身では少なくとも120cmを超えると推定されています。

指定のもう一つの理由は、仮面を装着した状態であることです。眉は際立ち、頬に一段高くなっている部分があります。縄文時代の終わり頃の集落遺跡からは、稀に仮面が見つかることがあります。大規模集落遺跡では、土偶は数百点見つかりますが、仮面は数点見つかる程度です。その貴重な仮面を装着する状態の萩内土偶は、縄文時代の精神世界を示す資料として、大変貴重です。



大型土偶頭部 盛岡市萩内遺跡出土 縄文時代後期 重要文化財 文化庁蔵

### 縄文時代晩期（約3,200～2,100年前） 土偶の極み—遮光器土偶—

縄文時代の終わり、晩期になると、歴史の教科書でも馴染みのある、遮光器土偶が出現します。

遮光器土偶とは、特徴ある目の表現が、北方民族が用いていたサングラス（ゴーグル・遮光器）に似ていることから名付けられた土偶です。亀ヶ岡文化の土偶形態で、青森県から新潟県北部あたりまで、見つかります。

遮光器土偶は20cm以上の大形のものと、15cm程度の小形のものがあります。大形のもの数は少なく、摩耗がほとんどありません。集落全体のマツリの道具と考えられています。

一方、小形のもの数は多く、磨耗が著しいものがほとんどです。この現象は、小形の遮光器土偶は個人のお守りとして持ち歩くために小さく、また、肌身離さず持ち歩いたことによって、磨耗していると考えられています。

縄文時代約1万年のほとんどで作られ続けた土偶。そのうつりかわりを辿ると、形態の発展とともに、当時の習俗や、マツリの形に迫る情報をも現代の私たちに提供してくれています。



遮光器土偶 盛岡市手代森遺跡出土  
縄文時代晩期 重要文化財 文化庁蔵



遮光器土偶 岩手町豊岡遺跡出土  
縄文時代晩期 当館蔵